

城里町が推進する 水道の啓発事業

横浜ウォーター、茨城キリスト教大とセミナー

茨城県城里町は、施設更新時期到来に伴う支出増と人口減少等による収入減という課題に直面している。一方で、令和6年度に茨城県が推進する水道広域化へ参画することとを決定しており、今後、県水受水を前提として、浄水場をはじめとした施設の統廃合、配置最



加倉井主幹

適化に取り組んでいくことが必要がありました」と述べている。同町の水道事業が大きな転換期を迎えているなか、課題となっているのが「住民との対話不足と水道への住民の関心の低下」だという。加倉井美鈴・城里町上下水道課主幹は「水道は生活の基盤であるにもかかわらず、その重要性や課題に関心を持たない住民が多く、特に若年層との接点が乏しい状況でした。また、茨城県内において水道の広域連携が進む中で、住民に対しその必要性や効果を十分に説明する場がなく、持続可能な水道事業に向けて住民の関心をより上げていく必要がありました」と語る。

こうした状況の中、城里町は令和6年度に国土交通省の「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」に参画した。国交省から同業務を受託した横浜ウォーターから協力依頼があったことがきっかけで、同社とは5年度に業務で委託契約をしたことで接点があったという。

セミナーは、茨城キリスト教大学の協力を得て令和6年10月に実施した。セミナーは全4回の開催で、水道についての基本的な知識の講義や、城里町の浄水場等を実際に見学してもらうなど、前半は「インプット」を中心に行った。後半は前半に学んだことをもとに、「将来の水道のあるべき姿」について、ワー



文化デザイナー学院の学生が表現物を制作



水道カフェで利き水体験

国交省セミナーに参画 水道カフェで対面交流による広報

見学など、「地域と水」が密着に関係していることを意識できるような内容とした。また、水道事業に携わる職員を含めた公務員の仕事についても説明するなど、幅広く「水や水道、水道事業に関わること」についてのインプットの機会とした。加倉井主幹はセミナーの成果について「学生たちの意識の変化、そして

次頁に続く

水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務の概要

国土交通省の事業「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」は、若年層が水道の歴史や現状を理解すること、将来あるべき水道のあり方やその負担を議論し、同世代へ向けたメッセージをつくりあげていくことを目指すセミナーを企画、運営すること、若年層に水道に対するより一層の理解を求めることを目的としている。令和6年度、7年度のいずれも横浜ウォーターが受託している。

若年層の水道への理解促進へ

横浜ウォーターが企画・運営

久保田裕史・横浜ウォータープロジェクトリーダーは「参加者の多くから『地域の水道を考える良いきっかけになった』という感想があがっています。城里町では、セミナーの後に水道カフェというイベントを企画したところ、セミナーに参加した学生が運営に協力するという好循環が生まれています。また、長野県立大学では、秋葉芳江教授が担当する授業『エコレター概論』においてセミナーを開催しました。今年度の後期からこの授業のシラバスに水道に関する講義を組み込むことが決定しているとのこと、成果を話す。

令和6年度は、茨城県城里町および茨城キリスト教大学、長野市および長野県立大学と連携してセミナーを開催した。セミナーの前半はインプットの時間として、グループで将来の水道のあるべき姿や同世代に向けたメッセージを考え、発表した。長野市および長野県立大学とのセミナーは、同大学グローバルマネジメント学部約60人が参加した。セミナーの開催回数は2回で、長野市内の上下水道施設の見学やメタバース環境上でのライブ説明会などによる事前学習をしたうえで、未来志向で社会課題の解決を目指す「フューチャー・デザイン」を基に、長野市の水循環や水道の姿と今すべきアクション、そのアクションの4地域でセミナーを



Yokohama Water

With water for the future and beyond

ちから
あなたのまちの技術になる

上下水道事業運営をサポートする横浜市水道局100%出資団体です。

横浜ウォーター株式会社

<https://yokohamawater.co.jp/>

☎ 045(651)6100(代表)



特集 中小規模水道の持続に向けて

前頁から続く

行動変容と考えています。初回のセミナーでは、水道について『わからない』と話していた学生たちが、最後には、同世代に水道に関心を持つてもらうためにはどうすれば良いかを真剣に話し合い、『知る機会』の創出を語るなど、水道に関心に向けてくれました。また、当課としては、意見交換をすることによる関心の深まりを肌で感じる機会となったことや、民間企業による講義や資料作成の技術を見られたことなども、参加して得られた成果と考えています」と話す。

水道カフェで双方向コミュニケーション

その後、今年1月には「対面交流による広報」として、人的・予算的負担の小さい展示形式と、運営において地域住民の力を借りたカフェ形式を合わせた「水道カフェ」を開催した。セミナーにおいて双方

向コミュニケーションの重要性への気づきが得られたことが、開催に至るきっかけとなったという。

「座学や現地見学、ワークショップなどを経て、水道への意識が『知らないこと』から『気になること』へと変化する学生の様子を肌で感じることで、双方向コミュニケーションによる興味・関心の深化を実感しました。また、参加した学生の意見から、心理的に参加ハードルの低い『知る機会』の重要性を感じました。一方で、令和6年度に開催した城里町水道事業運営審議会においては、ワークショップの手法を用いた意見交換を実施したところ、活発に意見が交わされ、委員同士の相互理解や協議テーマへの意識の深化も見られました。一般公募の委員もおり、メンバー内で知識や情報量に差が生じていたものの、双方のコミュニケーションにより、わからないことを聞きやすい雰囲気が出され、

知識や経験の差による壁が和らぐなど、双方のコミュニケーションの可能性をより強く感じる経験となりました」（加倉井主幹）。

1月15日から23日の期間で、水道事業の啓発を目的として、日本の水道の歴史や城里町水道事業の概要、茨城県が推進する広域連携、セミナーの紹介、水道に関するQ&A、クイズなど、水道に関する展示コーナー「水道展」を開催した。その最終日には、参加者の増加などの相乗効果を期待して、農家やパン屋などが出展するプチマルシェ「しろさとコラボ」、一息つける憩いの場を提供する、地域おこし協力隊の関川隊員の運営する「コミュニティカフェ」とコラボレーションした「水道カフェ」を行った。水道カフェでは、水道展に加え、利き水体験や、水道への意見や水道カフェの感想など付箋に書いて貼ってもらうコミュニケーションボードも行った。また、当日の様子や運営

に参加した学生のインタビュなどの動画を制作し、YouTubeで公開をしている。町と連携協定を結んでいる常磐天

加倉井主幹は「従来の説明会や広報誌といった広報の手法は、いずれも水道事業者から住民へお知らせする性格が強いものです。水道カフェでは、利き水体験やコミュニケーションボードなどで運営者から来場者に直接声掛けする機会を作り、コミュニティのハードルを下げる工夫を行いました。実際に『町の水道料金は県内で何番目？』など質問が多数出た。また、双方向コミュニケーションを実現できた。また、セミナーに

と振り返る。

また、カフェ形式としたことについては「説明会方式で負荷となりやすい資料作成や日程調整にほとんど努力を割く必要がなく、また、地域住民や地元生産者等の力をお借りすることで、人員不足を補うことができ、業務過多や人員に余裕がない事業者でも充分実施できると感じました。加えて、今回の展示物は既存資料を活用し、紙やテープを使った職員の手作りによるもので、会場代がかからない町庁舎内で開催するなど、『最低限のコスト、最低限の労力』でイベントを行えたことは大きな意味を持つと考えています。また、マンツーマンでの対応により、質の高い質疑応答が可能であるとともに、来場者にとっても時間拘束がなく自由に来場できることは良い点だと思いましたが、このメリットを語る。

城里町は今年度も引き続き、国交省の「水道事業の啓発に向けた調査検討等及びセミナー企画運営業務」に参画した。前年度のセミナーに参画し、その効果に手応えを感じたことから、町が連携協定を締結している文化デザイナー学院を訪問し、相談をしたところ、協力を得られることとなった。セミナー企画運営業務を受託する横浜ウォーターを加えた3者で打合せを重ね、内容を決めていった。「この事業では同年代へのメッセージを作り上げることが目的としていますが、文化デザイナー学院で学ぶ未来のデザイナーに、『メッセージ』のその先の『発信の手法』まで考えてもらえるのではないかと、考えました」（加倉井主幹）。

セミナーは7月に全4回開催した。インプットの内容は基本的には前年度と同様で、水道に関する講義や城里町の浄水場の見学を行った。アウトプットは、メッセージだけでなく、発信手法の企画提案や表現物制作を目指すことから、初回のセミナーよりメッセージの作成に取り組み、第2回ではメッセージに共通点がある学生でグループとなり、表現物の制作に向けての打合せを行った。第3回で表現物の制作を進め、第4回でメッセージと表現物の発表を行った。

4つのグループ制作した企画は①めぐるうるおい。めぐるわたし。「城里町化粧品事業LISUI」の提案②「今日わたし、水になりました。」③水道について学べるボードゲームで遊ぶ④見えて取り入れるなど、積極的に活用していきたいと考えています」と振り返る。

加倉井主幹は「1カ月の短い期間で、初めて知識を得てから、企画制作したとは思えない程に、充実した企画ばかりが提案されました。全体を通して感じたことは、『他者に伝えよう』と考えることが、知識も関心もより深めていく可能性

知る機会の創出と誰かに伝えたいくなるような水道事業を

最後に、加倉井主幹に今後の啓発事業の方向性を伺うと、「昨年度のセミナーへの参画を経て、い」と思われているわけではなく、きっかけさえあれば、『知る機会』を受け入れてもらえるというところを知りました。そして今年度は、誰かに『伝えよう』とすることで、知識も関心もより深まるということを知り、1カ月前には『水道展』という経験を経て、今後目指すべき方向性は『知る機会の創出』と、誰かに伝えたいくなるような水道事業』ではないかと考えています。具体的には、秋頃に水道カフェの開催を考えており、その中で今年度のセミナーで学んだ企画のアイデアを実現することはできなくても、可能な形で取り入れるなど、積極的に活用していきたいと考えています」と振り返る。

上下水道料金徴収業務を委託しており、町水道事業と包括連携協定を結んでいる大崎データテックとの官民連携で活動を進めていきます」と話してくれた。

横浜ウォーター、文化デザイナー学院とセミナー